



## とくしゅう 本とまち

私たちが人類の数百万年の歴史のなかでは、本もまちもごく最近に出現した青二才である。本がなくなったら人は生きていけるし、もちろん、まちがなくなっても人は生きていける。それでも私たちは、本とまちにこだわりたい。本はひとつの宇宙であり、そして、まちもひとつの宇宙であるから。



## アフリカ、そして釜ヶ崎の古本屋

アフリカの農村に滞在していた頃、首都にあがったときの一番の楽しみは街の本屋をのぞくことだった。本屋といっても、ある程度まともに本をそろえているのは、大学の書店かインド人が経営する本屋であるが、私が頻繁に立ち寄ったのは路上の古本商であった。首都にある青空市場のまわりで本や雑誌を地面に並べて商う男性が何人もいた。

彼らが扱っている書物の数はさほど多くはないが、ときどきアツと唸るような掘り出し物があったりする。たとえば、『北ローデシアにおける土地・労働・食事』を見つけたときもそうだった。収められているモノクロ写真が美しいその本は、1930年代にアフリカの焼畑農耕民の村でフィールドワークをした人類学者による民族誌である。現在では新版が出たが、しばらくのあいだ入手がきわめて困難な本であった。古本屋では、このような思いがけない本との出会いがある。ほかに、植民地時代にキリスト教伝道師らによって編纂された現地語の辞書や文法書なども古本屋で入手した。

古本屋に行くことが楽しいのは、いろいろな本と出会うことができるというほかに、売り手とやりとりができる点にもある。アフリカでは、値段を高くふっかけられたことはあまりないが、相手も買わせたいから必死に売り込んでくる。こちらは、欲しい本であれば値段交渉をするし、そうでない場合はどう断るかが腕のみせどころになる。こうした即興のやりとりが楽しめるのも、古本屋めぐりの醍醐味である。

現在、私が暮らしている釜ヶ崎の街には、南海電車の高架線下にわずかに一軒、小さな古本屋がある。私は時々そこを訪ねて古本を購入しているが、人口約3万の街で本屋が一軒というのは、あまりに少ない。労働者の数が多かった

頃には、この街には10軒あまりの本屋があったと聞く。そのなかには古本屋・新刊本屋だけでなく、貸本屋もあったようだ。またこの街では、早朝に路上で物を売る泥棒市と呼ばれる青空市が名物であった。なかには古本を販売する露店もあったが、その泥棒市も今年の冬に撤去されてしまった。釜ヶ崎での朝の古本探しは、値段の交渉などを含め、さまざまな会話も楽しめただけに残念だ。

しかし、そんなことで感傷にひたってはいけぬ。この街に古本屋を復活させたいのであれば、自分たちでつくればよい。そのような思いで、ささやかではあるがココルームで文庫活動をすすめている。もともとココルームにはかなりの数の本があった。それらにあわせて釜ヶ崎、大阪に関する本、あるいは都市、フォークロア、芸能などを切り口とした本などを少しずつそろえている。

文庫の存在を知った方々から本をいただいたりもした。そのなかには、ある男性の数十年前に亡くされた奥さんの愛読書もある。蔵書の所有権放棄を決断された浅野卓夫さんから寄贈いただいた本もある。あるいは、この街を題材として学生が書いた論文の抜き刷りや、お客さんが持ってきてくれた釜ヶ崎関連の新聞切り抜きを貼ったスクラップブックもある。このように、さまざまな思いがこめられ集まって来た本が棚に並んでいる。

それらの背表紙を眺め、手にとり、ページをめくり、そして本をきっかけとして自由に語りあえる場。これもひとつの古本屋のかたちであると思う。

## 本と人と時間と使い方

「書をもって、まちにでよう」というチラシを先日みた。かつて、書を捨ててまちにでようと、あたまでかちを擲擧することばがあって、いつの世も「書(物)」とか「ことば」は、まわりくどかったり、とっつきにくかったりする。そう、ことばづかいというように、ことばは使い方が重要なのだ。

ことばの使い方のひとつに、本がある。本を書いたり、本に書いたり、読んだり、枕にしたり。本の使い方はほんとに可能性がある。そして、本の存在とは人間存在にとっても似ているように思える。印刷機がうまれオンデマンド印刷がでてくるまではなしだが。一冊の本が存在するためには何百冊という本が同時に存在した。一冊がうまれるまでには何人もの働きを要し、その働きのおかげでわたしたちは本に出会う。ひとりで生きていられるわけもなく、たくさんの人の働きで生きていく人間存在である。一冊の本が人生を変えていくように、ひとりの人間に出会うことで人生が変わることもある。固有の「一冊」「ひとり」は、他の本、他者の存在とからまりあって、織りなされている。何億何万枚という頁に透けてにじんではいるのは、膨大な時間だ。頁をめくるのは風だ。

生きていくと不安になったり、焦ったり、気持ちがかんがらがることもある。そんなときは、大切な本を声にだして読んでみるという。気にいった箇所をゆっくりと声にする。ここにすうと風がはいってくるだろう。本の使い方と人のつきあい方も空気をふくんだものである。そんなことを教えてくれたのも、いくつかの本だ。まちには、たくさんの人が生きていて、たくさんの本のようにみえてくる。本の頁がはたはたと風にめくられていく。

このところ、311以降、世界が変わってしまった、と思う。たくさんのいのち、たくさんのものが失われ、便利で快適な生活を支えていたものはなんと脆弱だったのかと気づかされ、そして原発の問題に、何をどう考えていいのかわからなくなってくる。こんなときには、あたらしいことばが必要だと思う。

でも、そのあたらしいことばとは、突然ふってわいてくるものではなくて、熟考される思考、果てしない対話の果てに、挫折のなかに、祈りのなかに、希望のなかに、信じるなかに、こころのどこかに、あるものだと思う。それをさがすために、わたしは本をひらく。本がこの経済のなかで反省すべき問題をもっていることも、もちろんある。けれど、未来につながる本の頁を、ひらきたい。

何枚もの頁がはたはたとめくられ、今日の風がふきぬけていく。

上田假奈代(詩人、ココルーム金魚)



## ヒトリゴト

さて、どうしたものか。幼い頃はどちらかといえば読書家であったが、ここ数年は漫画を除けば年に数冊読むぐらいだ。昔読んだ本を思い出し、その中の一冊を取り上げて街と絡めて書くこともできるがそれはやめておこう。本と街といえば日本最大の書店街がある東京の神田神保町が思い浮かぶが、これもここでは書かなくても良い気がする。では、「街で本を読む場所」はどうだろうか。…うん。悪くない気がするのでこれで書くとして。

街で本を読む姿を思い浮かべてみる。

まずは電車の中。混み合った、あるいはがらんとした車内で化粧している姿や携帯電話を弄っている人が増えたけれど、それでもまだまだ本を読む人も結構いるものだ。表紙を隠していたりするけれど、教科書や学術書が結構多い。学生や社会人が勉強をしているのだろう。生活の中で時間を効率よく使っている印象を受ける。

次に公園のベンチ。最近あまり見かけなくなってしまったのが残念だけれど、木漏れ日が降り注ぐ中、本を読む姿をみかけると和やかな気分になる。生活の中で時間を丁寧に使っている印象を受ける。

そして、私にとって街で本を読む場所といったらはずせないのは喫茶店だ。本を持ち込む人もいるが、店に置いてあることも多い。ほとんど本を読まないといっている私の手が自然に伸びてしまうのは、ただ時間を潰すためだけではない気がする。場の雰囲気、本自体の魅力、色々と理由はつけられるだろうけれど、ただ開きたくなるという感覚を大事にしたい。

時代は移り変わり、本の代わりにノート PC や携帯電話を弄る人が増えるのも致し方ないことだ。ネットに繋がればいつでも欲しい時に欲しいだけの、それ以上の情報が得られるのだから。とはいえ、本の魅力が無くなったわけではない。本は私が生まれる前からあったし、私が死んだ後もあるだろう。人が人として生き続ける限り、街で本を読む人もいなくなりはない。

あなたにとって、街で本を読む場所、ありますか。

ヨミビト シラズ(ココルーム黒い服)

## 本、読むこと以外の意味や、あれやこれや

わたしは読書がへただ。活字を集中して、読むことがなかなかできない。人生の中でちゃんと最初から最後までよむことができた本の数を数えてみたら、両手と片足くらいで足りてしまうのではないかと思う。「わたしも読書をはじめたのは、20代半ばからだよ。」と言って聞かせてくれる人の声を励みにし、そろそろ読書ができるようになる時期なのではないかという淡い期待を胸に抱きながら、手に本をとっては数ページの斜め読みを繰り返す。

そんなわたしの働く、「ココルーム」に岡本さんという新しいスタッフさんがやってきた。「闘う人類学者」と自称し、古本をこよなく、こよなく愛している。岡本さんはココルームに住んでいる。ココルームの奥座敷をオカモトルームよろしくアレンジし出し、去年の秋ごろから大好きな古本屋めぐりで発掘してきた大量の古本の所蔵をはじめた。岡本さんが読むだろうと、いろんな人が本を持って来てくれたりするようにもなった。現在カラーボックス4つ+そこに入りきれない本がはみ出してきている。岡本さんは、その古本たちを眺めてニヤニヤとうれしそう。自分ひとりでニヤニヤするだけでなく、人に自慢をするのがともかく楽しいそうで、「まいちゃん、きょうの（古本屋めぐりの）収穫聞いてくれよ…」と、握りしめたこぶしに力をみなぎらせ、こぶしを震わせながら声をかけてくる。「聞く」と答えると、ウハウハと本を本棚から取り出し始める。その手つきはいつにも増して機敏だ。そうして積み上げられた本の高さ、ゆうに30センチ。数にすると10冊以上。1冊ずつ「次は、コレ」ということばとともに、岡本さんから手渡される本を見る。そしてどうしてこの本を選んだのか、や本にまつわるエピソードなんかをちょこっと話してくれる。そして、わたしも意見を言ったりする。これが意外とたのしい。わたしは本は読めないけれど、岡本さんの本の紹介は飽きない。本との出会いを心からよろこぶことができています。そこで知った本の本数はかなりの冊数になっていると思う。

話は変わって、今日はカマメの俳句会。外で俳句を書いてこようと思立ち、そのときに、句を書く用紙の下敷きなる良い本がないかと岡本さんに声をかける。「それなら、絶対にこれがいい」と折口信夫さんのアルバム本を渡してくれた。なにも知らずに折口さんの写真が表紙にあるその本を片手にまちを歩き、良い場所を見つけ、そこに折り畳み椅子を出して座って俳句を書いてきた。帰ってきて、本を返そうとしたときに、気になってその本をペラペラとめくってみると、折口さんはこのまちに住んでいた方で、ココルームやわたしの家のご近所さん。和歌なんかも得意だった方だと言う。明治時代には近くの今宮中学校で先生もされていた。めがねのナイーブそうな面持ちの折口さん。「今日は折口さん、まいちゃんと散歩に出られてうれしがつてと思う。ほんとだよ。」と岡本さん。確かに。そう考えれば、本を持って歩いただけのことなのだけれど、折口さんと散歩をしたみたいだ。ほんとに喜んでもらえていたら光栄だなあ、と思う。

また、ある人は、岡本さんの本棚を見て、霊的なものを感じ取っていた。古本は、いろいろな人の手を渡ってくるので、いろいろな想いをひきつけてくるものが多いらしい。手垢もシミも、折り目もたくさんついている。

本は読むだけのものではないのかもしれない。わたしは読書はヘタだけれど、本から、岡本さんとのたのしい時間だったり、出会ったことのない、ご近所さんとの散歩の時間だったり、霊的なものとの出会いだったり…をもらっている。そんなこともあるものだ、ということに気づけたのは、岡本さんの古本好きによるものだと思う。出会いが本をよび、本がまた出会いをよぶ。これからも、ココルーム奥座敷での本とのたのしい時間は続きそうだ。

はらだまい(ココルームの羽帽子)

※折口信夫(1987-1953) 大阪市西成郡木津村(現在の大阪市浪速区鷗町)生まれの民俗学者、国文学者にして歌人。幼いころより和歌や芝居に親しむ。豊かな古代の知識と詩人的直感で、「マレビト」や「常世」など独特の概念をつくった



# 書物の方舟

i

本のある世界ではなく、本のない世界とのつながりが大切だ。

饒舌になることよりも、寡黙に耳をすませることが大切だ。時には書物から遠く離れること、書物を思い切って放擲すること。

情報文化のなかで、じっと冬眠すること。

そうすることで、極小の、野性の本をゆっくりと編むこと。風を友だちにすること。

島々を歩いて、手づくりした本を、未来の懐かしい人に届けること。

出会った人とともに、ちいさな歌をうたうこと。

サウダージ・ブックスは、旅と詩をテーマにした非営利のスマールプレス（小出版）だ。これまで、ブラジルのサンパウロやアフリカのザンジバル島をめぐるトラヴェローグ、世界各地の群島の詩人の小詩集などを刊行している。文字や造本などデザインにこだわり、手仕事の感覚を残したシンプルな本作りを心がけている。

文筆・編集・出版のかたわら、地域に根ざした文化活動もおこなってきた。ブラジル内陸部やバリ島など、「本のない世界」に息づく知恵をめぐる自分たちのフィールドワーク体験を活かし、「本を介して人と人、野と人をつなぐ場所づくり」をモットーに、2008年、神奈川県三浦半島に「ブック・サロン」をオープンした。

海山のあいだの緑にかこまれた古民家に、「南への旅」をテーマにした文芸書・人文書・写真集など、蔵書数500冊ほどのちいさな図書室を開設。そこでは、文化人類学の今福龍太さんのキューバ文学・文化研究の個人蔵書をお借りして、「大王椰子文庫」として公開する活動もした。また、書物やアートをめぐるさまざまなイベントを企画した。場所を持つことで出会うことのできた多くの人々と楽しく語り合った日々は、幸福で、充実したものだった。

2011年、オープンから3年がたってブック・サロンをいちど閉室し、事情があつて活動の拠点を京都の京田辺に移転することになった。三浦半島の海辺を離れて、山里へ。今春からは関西を拠点に、引き続き旅の本、詩の本の小出版を地道におこないつつ、新たな活動の展開を模索している。

そしていま、この転機に、自分たちの活動と「本のない

世界」との関わりを、あらためて深めたいと思っている。具体的には、自然条件や社会経済的な条件によって情報文化の中心から隔てられた「島」、あるいは「シマ＝小さなローカル・コミュニティ」で、一人の出版人として地域の本の場所づくりに協力したいと考えている。

都市生活者の読書人であるぼくらは、本を所有しすぎている—これは、出版文化に近い人間、本好きな人間の多くが共有する暗黙の実感だ。かくいう自分も、仕事柄大量の書籍にかこまれて日々暮らしている。いわゆる「積ん読」状態の本も多い。

もちろん、毎日読まずとも、大切な書物を人生の友としてそばに置いておくことに意味はある。しかも書かれた内容だけでなく、モノとしての本のあらゆる側面（装幀、厚さや重さ、紙やインクの質……）は、五感をつうじて豊かなメッセージを、時の経過とともに伝えてくれる。書物は、頭だけではなくからだを使って交わり、長い年月をかけていねいに耕し、手塩をかけて知恵や物語の実を育てるべき大地のようなものだ。

けれども、命をかけて耕すべき書物、自分の魂を埋葬する大地となるような書物、そして次の世代へかならず伝えなければならない大切な書物は、いったい自分の書齋にどのぐらいあるのだろうか？

今日の資本主義の社会で、大量に生産され、大量に消費される本。めまぐるしく移り変わる情報の波に流された所有欲、あるいは知的な虚栄心から、ぼくらの本棚は、あれもこれもとのみみ込んで、ぶくぶく不健康な贅肉をつけてはいないか？ ふだん見て見ぬふりをしている情報アクセスの地域格差の問題、大量に消費している紙の原料となる木材の伐採や植林による環境破壊の問題、出版業界における書籍の制作から流通まで、あらゆる過程で浪費される莫大なエネルギーのことについても、そろそろ反省すべき時期だ。

この本を、今ほんとうに必要としているのは、自分ではない遠いどこかの誰かではないか？ ぼくらが享受するこの本一冊作るのに、いったいどこの地の、何人の方々の生活が犠牲になっているのか？ あまりに多くの本を所有しすぎていること、本を一部の人間が独占していること、これはやはり問題なのだ。



サウダージ・ブックスは、蔵書の所有権を放棄することを、ここに宣言したい。

書物の知を独占的に所有する、という特権に安住するのはもうやめよう、本の共有の道を開こう、そう思ったのだ。先ほど述べた情報アクセスの格差の問題を都市生活者として反省し、「本のない世界」へ蔵書をまるごと寄贈することを心に決めた。

不要な本を処分するというのではない。愛着のある多くの書物たちを手放すことを想うと、からだの一部を切断されるような痛みやさびしさを感じる。どれも大切な本なのだ。

また、土や動植物、さまざまなモノとじかに関わり、そこから日々の知恵と糧をつむぎだす「野生の思考」の生きる世界に、頭でっかちな書物の知を無理矢理押しつけるつもりもない。

けれどもぼくらは、自分たちの旅の経験を通じて、そうした野生の思考の生きる世界にも、「野」の知恵と「本」の知恵を創造的につないで、未来を切り開こうと懸命に努力している人がいることを知っている。

ブラジル奥地の農場コミュニティで、来る世界について孤独に思考しつづけた日本人移民の古老W・Hさん、バリ島の芸能村に暮らす薬草遣いの呪術師K・Lさん、奄美・沖之永良部島で黒糖焼酎の蔵元として群島の文化活動を支えるN・Tさん……。旅するぼくらに生きるべき道を示してくれた「文字を持つ伝承者」たち、その固有の顔が思い浮かぶ。

そしてかれらのかたわらには、「コンテンツ」とか「データ」とか抽象的な情報に決して還元されない、日焼けして湿気を帯びて土の色の染み付いた、やはり固有の顔をもつ書物がすこしだけあった。ほんとうにすこしだけ、何度も何度もたいせつに読み込まれ、読み手の歴史と記憶の襞が幾重にも折り畳まれた「具体の書物」が。

サウダージ・ブックスは、そんな「本がないけれど本を必要とする人びと」の暮らす地域に、当方の個人蔵書をすべて贈与 = 寄贈するという企画を立ち上げた。題して、「書物の方舟」。

ぼくらは、小出版の活動で「叢書 群島詩人の十字路」という詩の本のシリーズを発行し、沖縄・奄美をはじめとする世界の島々の歴史や文化に多くを学んでいる。だから、こ

のプロジェクトが、「群島 - 世界」へのささやかな恩返しになれば、という気持ちがあるので、希望する寄贈先をいちはおう「島」としている。ただし、はじめのほうにも書いたように、現実の島にかぎらず「シマ」、つまりさまざまな事情でいま本を必要としている周縁的なローカル・コミュニティ一般に、このプロジェクトを広く呼びかけたい。書物の存在を、そして書物とともにある時間を、海やボーダーのむこうにあるより広い世界への扉として感じてほしいと思う。

読書離れや電子化の波、出口の見えない経済不況など、本というメディアをとりまく環境が、今さまざまなかたちで荒廃しつつある。2011年の3月11日におこった大地震と津波によって、東北の大製紙工業が壊滅した。そこで働いていた人のことを思うと、胸が痛む。これから紙不足が、出版業界に深刻な影響をおよぼしはじめるだろう。

「現行の世界をおびやかす新たな大洪水に抗して、ひとりの作家にはいったい何ができるだろう。ひとりの人間には、それが誰であれひとりの人間には、科学がみずからをよりよく減ぼすために発明してしまった熱核死に抗して、何ができるだろう」(J・M・G・ル・クレジオ)。差し迫るこの「大洪水」に抗する、一隻の書物の方舟——現代という時代の荒野に向けて吹き込まれようとするこのささやかな贈与の風が、本にふれあう人びとの心に変化を生みだすことを、ぼくらはいま、痛切に願っている。

本は誰かからの贈りものだった。

生きている誰かからの、もう死んでしまった誰かからの。誰かから贈られた富は、誰かに返礼しなければならない。むかしの人はそう教え、その古き道を守る人もいる。トロブリアント諸島の人びとのおこなう「クラ交易」の儀礼。宝物の貝殻とともに、神話の物語が島々をめぐる航海する。

ぼくらは、書物のクラ交易をはじめよう。

かわいい本には、旅をさせよう。

たいせつな知恵と物語を、遠くに送り出そう。

小さなちいさな書物の方舟が、来る出帆にむけて待機している。

まだ見ぬ、「あなた」という浜辺を夢見て——。

浅野卓夫 (サウダージ・ブックス)



※編集部より  
二〇一一年三月、浅野さんから  
コールドームに本を贈っていただ  
ました。詩集、本づくりのため  
の本のほか、人類学者・山口昌  
男、写真評論家・飯沢耕太郎、  
評論家・坪内祐三の本など、段  
ポール二箱分の本は、現在、コ  
ールドームへみんなの文庫に収め  
られています。

# 微分帖と日々

「微分帖（びぶんちょう）」とは、宮田篤という美術家が考案した、何人もの人でひとつの物語を作ってゆく遊びのことだ。五年ほど前に彼とその遊びに出会ってから、ふと思いついたときに、私はその遊びを様々な人と試みている。用意する物は、何枚かの紙と筆記用具のみ。紙を半分に折って、本のように見ると、4つのページができる。1ページ目から、4ページ目まで、言葉を書いてゆく。例えば、1ページ目から順に「今日は」「あたたかいので」「春のうたを」「うたいたくなります」。その紙の間に、半分に折った別の紙を挟んで、誰かに渡す。渡された人は、それを読み、前の人の物語の間にできた新しい4ページに言葉を書く。例えば、「今日は あたたかいので『どこかへ』『散歩に出かけて』『サンドイッチでももって』『あの娘と』春のうたをうたいたくなります」。また誰かに渡し、同じように新しい4ページを書いてもらう…と、この行程を続けていく。ある日のココルームにいた人たちと作ったひとつの物語はこんなふうだ。

今日は あたたかいので  
どこかへ 散歩にでかけて  
ぽかぽかおひさま こんにちは  
ごちそうさま 食って  
休んで チャリで  
空に飛び出して 月あかりで  
なんとなく指をのばして ETみたい。  
西成まで出かけて 日浴びて  
ねて オレも  
ありんこさんも こんにちは  
サンドイッチでももって あの娘と  
春のうたを うたいたくなります。

ココルームで4ページを作ってくれたのは、一日に何度も来て手を握り大きな声で話をするAさん、字を書くことができないからと声で伝えてくれるMさん、放射能が恐ろしくて名古屋から来たというJさん、パソコンに向かう手を止めてくれるスタッフOさん、いつもすごい早さで競馬や電車について文を書いてくれるIさん…。ここを訪れる人々の声が、一つの物語の中に折り込まれてゆく。

微分帖を作ることは、ココルームやカマメで日々をすごすことに似ているな、と思うことがある。何か集中したいひとつの仕事にとりかかっている、必ず、誰かの声や手によって、その仕事は中断され、突然どこかまで連れて行かれたり、話の中で何億年も前へさかのぼったり、思わぬ人から思わぬ言葉がほろっと聞かれたりして、結局、その一見わけのわからない展開こそに夢中になっていたりする。そして、ココルームやカマメで微分帖を作る中で気づかされたのは、これまで私が微分帖をともに楽しんできたのは、このルールをすぐに理解できて、何の躊躇もなく字を読み書きすることができる人とだけだったのだな、ということだ。ここを訪れるみんなとそのままに、微分帖を作るとき、どのように遊び方を伝えるとおもしろいのか、それとも、もっと魅力的な新しい遊び方をみつけることができるのかを、いま探っている。

植田裕子（ココルームの琵琶湖）

こまどりしゃ描く釜ヶ崎



# 太陽と月と我が地球

アルミ缶二十三号

我が子らよ、泣くでない。嘔なげくでないぞ。あの小さな小鳥さえ、夜になればこの森林もりへ帰ってくるではないか。泣くでない、嘔でない。目の前の砂浜にいる海亀を見てみよ。産卵するために、なん百キロも時には千キロも海を泳いで来ては、吾が子のために右手半分はサメに喰われてなくしておるが、一生懸命穴を掘り一晩まんじりともせず、涙を流し続けながらも百個近くの卵を産んでは天敵にとられぬよう、そっと砂をかけて、又我が海へ帰って来るではないか。泣くでない、嘔くでないぞ。この我が地球がいつもしつかり抱いておるではないか。夢と希望をもって強く生きよ。思いやりをもって明るく生きよ。素直な心をもって幸せに生きよ。太陽も月も我が地球もすべての生物と太陽系の繁栄を願っておる。もし愚かなるいちぶの人類が欲望のために地球すべての生物を破壊し、みずからもこの地球から消滅したとしても我が地球はまた、四十五億年かけてこの地球を再生してやりなおすだけである。人類がつくった罪はみずからかぶるしかあるまい。それが大宇宙の法律や法則なれば致しかたないのではないか。人類誕生以来大きな節目にあたる今世紀においても我が地球の余の想いは永遠にかわらぬ。

アルミ缶二十三号：野宿生活をしながら、あいりんセンターの「センターだより」に和歌などを投稿



こんにちわ！釜ヶ崎をあるく。みんなであるく。あるきながら、考える。あるきながら、であう。であって、話す。笑ったり、困ったり、驚いたり、話してると、つながってるんだな、って思ったりする。

## 釜ヶ崎まちあるき

ココルームでは、釜ヶ崎の街歩きのガイドをさせていただきます。

労働者の街、芸能の街、大正モダニズム建築物が残る街、昭和の香り漂うアーケードのある街、社会福祉の街、日常生活に根づいた「表現」が身近に感じられる街……。さまざまな顔をもつ釜ヶ崎の街をゆっくり歩いてみませんか。気分転換をかねて東日本から大阪にいらした方も是非どうぞ。

所要時間：おおよそ1時間～1時間30分

ガイド料金：1000円（学生500円、こども・しんどい方は無料）

申込方法：電話、Eメールでお申し込みいただくほか、ココルームで直接申し込みください。

## KAMAP!

東日本大震災をうけ、余震や原発が不安な方など、釜ヶ崎にも多くの方がいらっしゃっています。一時的にでもこの街に滞在する時に、あったらいいものは何だろう、とみんなで考える中で、おすすめポイントがわかる地図を作りたいという案が出ました。地図にはないこの「釜ヶ崎」という街の魅力を、みんなで書き込んでゆく会です。釜ヶ崎を知り尽くした方も、この街に出会ったばかりの方も、一緒に一時間ほどの街歩きをした後に、即興的に地図づくりをおこないます。

次回：5月8日(日)14:00～／参加費無料(カンパ歓迎)、だいたい毎週日曜日

# EVENT PICK UP



ココルームとカマン！メディアセンターでは、日々さまざまなゆるやかなイベント・勉強会・相談会がおこなわれています。お気軽にご参加ください。くわしくは、<http://www.cocoroom.org> をご覧ください。

## 釜ヶ崎句会

月に一回、みんなで集まって楽しく俳句をつくっています。正式な句会のやりかたにのっとり、投句、選句、披講とすすめ、最後には暢春先生（俳人・能面師）による選評があります。つくった俳句は、滋賀県近江八幡市の俳句結社・氷志会（ひょうしかい）の選句の対象にもなります。

2011年4月の作品の一部を紹介します

おむすびと お茶を携え 菜の花見（万葉）  
 さくらいろ みどりの土手の 菜のきいろ（万葉）  
 野遊びに、夢中で道に迷つよな（心登）  
 早朝の、さえずり聴いて 何思う（心登）  
 久々に 食す母の味 菜の花、 pasta（ゆう）  
 保育園 お迎え帰りに 菜の花の海（ゆう）  
 チューリップの家 しあわせな人が棲む（かなよ）  
 タンシヨウビ 菜の花咲ころ やつてくる（小六）  
 野遊びで 子供といっしょに レンゲつみ（小六）  
 ぐんぐんと プランコ漕ぎし あの公園（わむ）  
 遠い日の 野遊びれんげ 畑かな（そゐ）  
 さえずりが 演歌と聞こえる 商店街（マイセン）

## 健康おしゃべり相談会

カマン！メディアセンターの縁側で、看護師さんとお口と歯の専門家が健康相談をしてくれます（無料）。ちょっとした健康の相談、血圧の測定、虫歯・歯磨きのことなど、おしゃべり感覚で相談しませんか？。歯磨きが変わりますよー。

毎月第三水曜日 午後2時～午後3時

2011年予定（4月20日、5月18日、6月15日、7月20日、8月17日、9月21日、10月19日、11月16日、12月21日）

### 釜ヶ崎から、 いろいろな人と いろいろな角度から 原子力発電について考えてみる

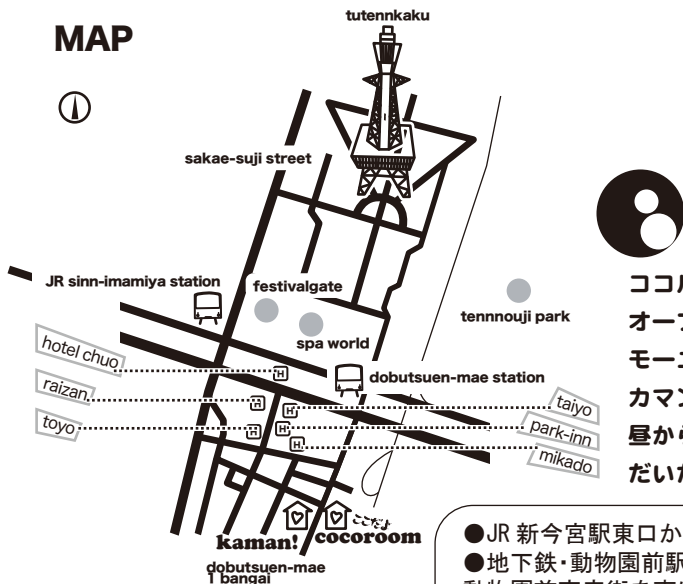
原発について、日々わたしたちが活動している、このまから、今、考えていくことに意味があるのではないかという考えのもと、連続企画をかんがえました。原発について知識がないけれど…本当に危ないの？日雇労働者ってなに？という方、どなたでも遠慮なくご参加ください

Vol.1 映画から考えるエネルギー  
～ミツバチの羽音と地球の回転から～  
5月15日（日）8：20 集合：動物園前駅 2番出口  
（現地集合の場合10時前に会場前）  
上映会場：同志社中学校 宿志館 魁ホール  
※申し込みの必要がありますので参加の方は5月10日（火）までにココルームまでご連絡ください。

Tel 06-6636-1612  
※上映会参加費 1000円  
交通費・ご飯代 は実費になります

\*以降の会は、ココルームのウェブサイトをご覧ください

## MAP



ココルームは「参加型カフェ」となっています。  
オープンはおよそ 10:00～19:00 ころ。  
モーニングは、金土日 08:00～10:00  
カマン！は  
昼から 19:00 ころです。  
だいたい毎日ひらいています。

- JR 新今宮駅東口から歩いて7分。
- 地下鉄・動物園前駅2番出口から、動物園前商店街を南に歩いて3分。商店街に面しています。

### ■ココルームでは、 活動のための寄付をつのっています。

三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通1585265  
トクティエイリカヅウホウジンコトバトココロハヤ

郵便振替 記号01090-5-48059  
ココルーム



特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）  
Non-profit organization The Room for Full of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

インフォショップ・カフェ ココルーム  
557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11  
tel&fax.06-6636-1612(+81)  
info@cocoroom.org  
http://www.cocoroom.org  
The Information Shop & Cafe COCOROOM  
1-15-11 Sannoh, Nishinari-ku, Osaka, JAPAN 557-0001

カマン！メディアセンター  
557-0002 大阪市西成区太子 1-11-6  
info@kama-media.org  
http://www.kama-media.org  
KAMAN! Media Center  
1-11-6 Taishi, Nishinari-ku, Osaka, JAPAN 557-0002